13
3184
1

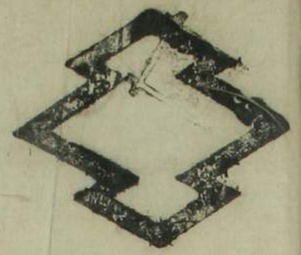
へ 13
3184
1
へ13
3184
1-3

丁卯新刻稗説

山東京傳作
歌川豊國繪　西村與八梓

於六櫛木曾仇討

全部七冊物



本六

木曾の名産お六櫛といふはむかしより木にて挽わり
さるる古文にも櫛作り竹のうつくしきをひき
さきやいくらく髪をぢのきくことをいふこと作り
はなはだたる物六といふ容顔美麗にして忠義貞節ふか
はなはだしなる女なり今の世の人の口碑のこれ物語とぞ
虚実いまだとしがたけれどもいとせんのいろえともうるべき
なれば絵草紙七冊物にして兒女の目を悅ばしめんとて今ふたたび
かの櫛を木曾のおがしらいろ人いろのうるどたぐひもあてはめ
女のかがみなればかの地のうらいろ人いろのうるどたぐひもあてはめ
女子のかしらふいごるまむしのしるしのあるこころ
きよむべきなり

文化三年丙寅夏稿成
同　四年丁卯春發行

山東京傳誌

昭和九年十月一日
購求
受來二定庫

其身まろ〜とらくども千辛万苦して
主君の一族をやしなひ子をそだて
主君の病苦をもとらふ大力勇猛世ゐ
たぐひなく忠志義心古今ゐまれなる
忠義の功徳ふりてのち
ときいむ
○鎌戸又八
西村氏

○鶴見多門妻久方亡魂
暴悪の者のたらふとしまさられ目前
ゆくゑどつぶふへびゼもとなりて死し怨鬼おそのゝ
のち孝子の供ろうとうけて
仏果を得ゝ

○牛嶋大之進
奸佞好色
大悪不道
容計をあなどり
人を害す
▲一旦さんあり
はひふへ天四詩を
▼悪報めぐりさたりて
その身とかぶる
積悪
▼

○又八妻於六
主君のたちふ髪をきりて米をかり
子とりてくらをとりとてのふ貧苦とろぎ
悲歎をえらびつひふ木曽の山家ふをと
獅をひきてをどりひとをこれとおろ六ぐ
のち時運ひらくる日と得て栄花をそろむ

孝太郎
丹三郎

ぜんぜんのまつ
あとろかふ

○大のしんに
なるまれさる
ろかのかなる
さたのてゐ
にもこりを
こちらにて
たちうちにて
ひとうち
ひとうち
あとをつけろ
けろかのろひ
ゆそひさいと
見てみふへしてわけろ
ゆくぞ

ゆめのあいだに一年さえて
ゆめ門おやこげきなつの
一ねんきにかりゝれば
老母ゝさせくゝ
ゆめのをつまてをれ
あくりのもはるゝぞ
ぶろじといとなゝ
日ゝれてかるゝ
にてぐきんふかをを
かしなるゝなぜか
二人さけゆぶろ
ゝちゝうおぐろ
ひぞろうがを
田のゆゝにけ
おゝゝ人ゝと
あれのをゝゝ人て
さるぐろをゝゝ
小口きにをさゝて
ぐゝゝもなくにげ
さうぬ丹ぐ人ゝろ
ゝりのおそれをあんじて
むゝひにいでゝ田の
中にうゝれゝゝをゝろけ
ういわゝしていさいのけを
きて大におゝろきあとを
ゝさゝておひゆれしゝうれに
ゆくへゝれぞうけゝ

「まいぞれゝ田のゝゝ
ふゝゝんぐゝきゝふゝい

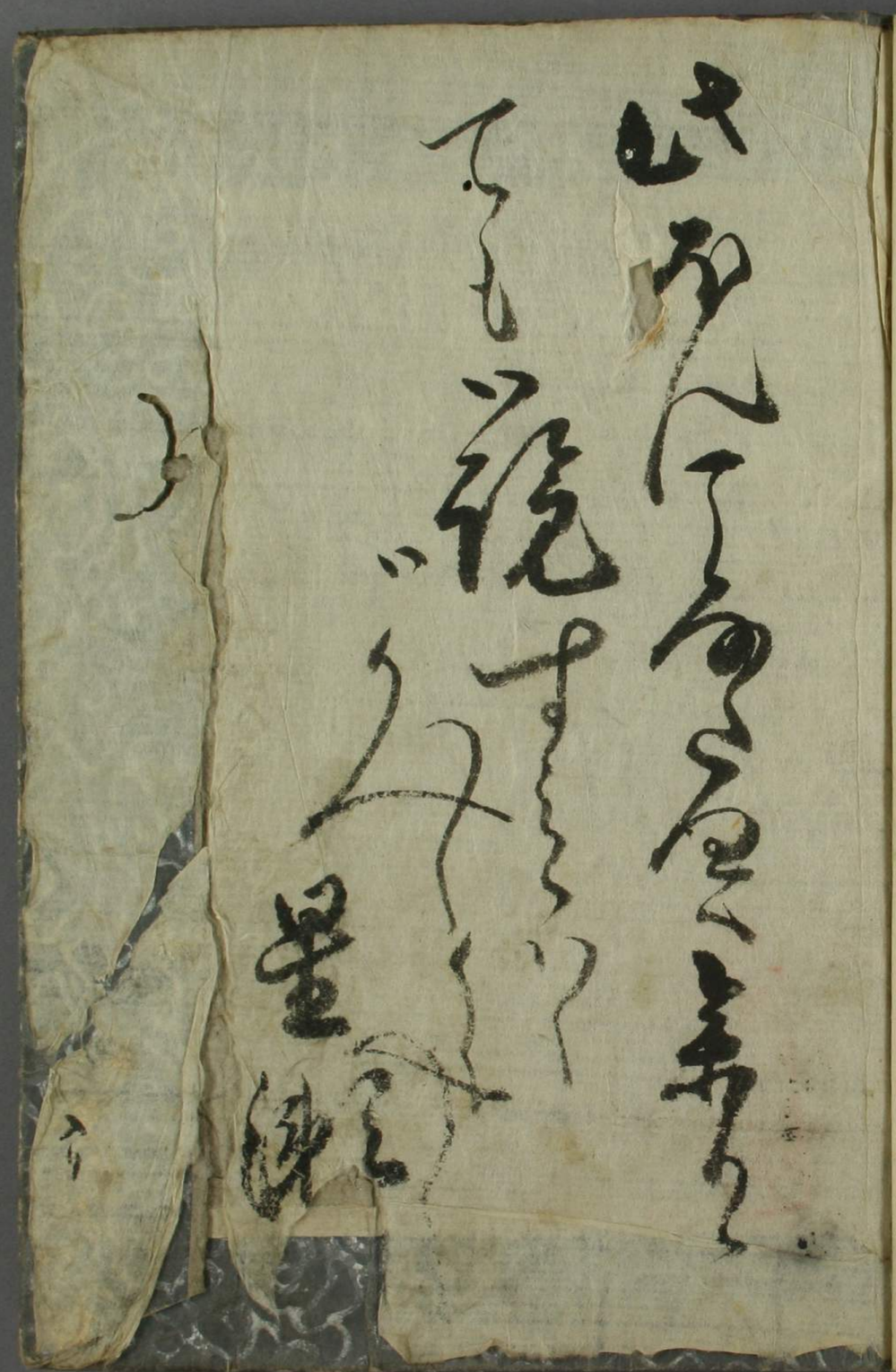
「まんまとしてゝゝ

大
八

岩
八

お六ゞ

お六ゞ
十二



改 栄二文庫